

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520204

研究課題名(和文) 仏教類書と説話集におけるその受容に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A fundamental study on the acceptance of Chinese anthologies of Buddhist literatures in Japanese narrative literatures

研究代表者

本井 牧子(MOTOI, Makiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00410978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の説話文学や唱導文芸における仏教經典に由来する説話の受容と展開の様相を具体的にあきらかにすることを目的として、両者の媒介としての仏教類書を対象とした文献学的調査を進めるものである。『今昔物語集』に影響を与えた中国の仏教類書『金蔵論』については、敦煌写本や高麗時代の版本などの新出資料にかんして、テキストの基礎的な分析・考察を終えたことが成果として挙げられる。さらに、譬喩因縁譚だけでなく、仏伝故事にも研究対象を広げた結果、仏教經典から仏教類書や經典の注釈書等を経て『釈迦の本地』などの仏伝文学が形成される過程を跡づけることができた。

研究成果の概要(英文)：A philological research on Chinese anthologies of Buddhist literatures revealed how these anthologies were accepted and developed into narrative stories in Japanese narrative literature/Buddhist preaching, and how they acted as a catalyst between the two. I made a fundamental analysis of the text of the Jin zang lun, the Chinese anthology of Buddhist literature, and its influence on Konjaku Monogatari Shu with regard to newly found documents, such as the Dunhuang manuscripts, and the woodblock prints of the Goryeo era. Widening the scope of research objectives to include not only tales focused on karmic retribution but also stories found in the biographies of the Buddha, I could trace the development of the literature on the biographies of the Buddha, such as Shaka no Honji, from the Buddhist scriptures found in the Chinese anthologies of Buddhist literature and from the commentaries on the scriptures.

研究分野：日本文学

キーワード：金蔵論 釈氏源流 仏教類書 譬喩因縁譚 仏伝 釈迦の本地

1. 研究開始当初の背景

漢訳仏典においては、教義を説く際にさまざまな譬喩因縁譚が用いられる。仏典に由来するこのような因縁譚は、東アジア各地で仏教文学の豊かな源泉として機能してきた。日本においても、さまざまな因縁譚が『今昔物語集』をはじめとする説話集や、寺院の法会における唱導などにとりこまれ、説話文学に彩りを与えている。

これらの因縁譚と、説話集や唱導文献をつなぐものとして、仏教類書が存在が挙げられる。仏教類書は、漢訳仏典から記事を抄出して集成したものであり、梁代の『経律異相』や唐代の『法苑珠林』などがその代表的なものである。

このような仏教類書のなかでも、説話集との関連で注目されるのが、中国北朝末期に釈道紀によって編まれた『金蔵論』である。『金蔵論』は、日本に一部が残存するのみで中国ではすでに散逸したと考えられていたが、近年、敦煌写本や高麗時代の版本のなかから新出テキストが相次いで確認され、注目を集めることとなった(荒見泰史「敦煌の故事綱要本」、『姜亮夫 蒋礼鴻 郭在貽先生紀念文集』、上海教育出版社、2003 年、崔鈺植「『金蔵論』」、『』9、2004 年 12 月)。

研究代表者もまた、「中国北朝後半期の仏教の類書『金蔵論』の研究」(平成 17～19 年度科研費 基盤研究(C)、研究代表者:宮井 里佳)、「仏教類書とその受容史 説話文学研究のための基礎研究として」(平成 21 年～22 年度科研費 若手研究(B)、研究代表者:本井牧子)において、日本伝存写本の調査分析と同時に、調査対象を敦煌写本・高麗版本へと広げて『金蔵論』テキストの探索を試み、あらたな敦煌写本により散逸部分の一部解明を果たすことができた。また、テキストが残存しない部分についても、目録や佚文等の分析からその内容を推定し、復元試案を作成した。その成果は、『金蔵論 本文と研究』(宮井里佳・本井牧子編著、臨川書店、2011 年、科学研究費(研究成果公開促進費(学術図書))として刊行、平成 23 年度新村出賞を受賞するなど評価を得ている。

『金蔵論』については、日本で古写本が発見されて以来、『今昔物語集』天竺部との密接な関連が指摘されてきた。しかしながら、ごく限られた本文しか知られていなかった時点においては、その関連は個々の説話レベルでの指摘にとどまっていた。ところが、新出本文にもとづく比較対照を進めた結果、『金蔵論』は単に説話本文を提供するにとどまらず、『今昔』の説話選択や配列にも影響を及ぼしていたことが浮かび上がってきた。同時にこれまで『今昔』編者の意図と解されていた部分についても、『金蔵論』本文に忠実に拠った結果であることも判明するなど、『今昔』のこれまでの読みは見直しを迫られることとなったのである。これらは説話文学

研究において仏教類書との比較検討が必須であることを端的に示すものであった。

以上のような経緯から、説話集や法会唱導における仏教類書の重要性を認識し、それまでの研究成果をふまえた上で、さらに発展させるべく、本研究を着想するにいたった。

2. 研究の目的

本研究は、説話集編纂や法会唱導に際して、漢訳仏典から譬喩因縁譚等を抄出・集成した仏教類書が果たした役割を、文献学的な調査研究によって明らかにしようとするものである。

仏教類書と説話文学や唱導との関係について言及される場合には、これまで仏教類書自体の流布状況や受容形態についてはほとんど問題にされてこなかった。しかしながら、近年の経蔵調査などにより、当時の流布状況が明らかになりつつあるなかで、これまで有力な説話の供給源としてしばしば取り上げられてきた『法苑珠林』の流布の痕跡が想像以上に乏しいことなども指摘されており、その位置づけについては見直しをはかる必要が出てきた。そこで、本研究では、仏教類書の伝本調査により、類書そのものの流布状況や享受形態を確認した上で、説話集や唱導文献との比較対照を行い、その影響を考察することとした。仏典にみられる譬喩因縁譚が仏教類書を通じて説話集や唱導文献などにとりこまれていく過程の一端を明らかにすることが本研究の最終目的である。

これらの目的のために、『金蔵論』はもっとも有効な研究対象といえる。『金蔵論』の巻の構成や説話配列からは、編者道紀が唱導という場を強く意識してこの書を編纂したことがうかがわれる。唱導のための譬喩因縁譚の集成を明確に志向した類書という点において、『金蔵論』は『経律異相』や『法苑珠林』のような大部の類書と一線を画するものである。さらに、『日本霊異記』『今昔』やといった説話集との関連も指摘されていることから、『金蔵論』を端緒として仏教類書受容の実態を明らかにすることを目指した。

また、国内の文献調査とならんで、敦煌や韓国の文献をも調査対象とすることで、敦煌や韓国における因縁譚利用の様相が明らかになることも予想される。それは日本の唱導における因縁譚受容とも通底する点が多く、東アジアにおける仏教文芸という問題に展開しうるものである。

3. 研究の方法

(1) 『金蔵論』の研究

『金蔵論』について、まず優先されるべきは全体像の解明である。全七巻(あるいは九巻)と伝えられながら、研究開始時点においては三巻分の不明部分があった。しかしながら、韓国において確認された『金蔵論』は高

麗時代の版本であったことから、同版のものが出現する可能性が充分にかんがえられた。そこで、韓国の研究者と知見を共有しつつ、逸文の探索をも含めた散逸本文の復元のための調査を進めることとした。

また、敦煌写本については、公刊されている目録等で誤った比定がなされている例も散見するため、影印やデジタルデータなどをも活用しながら、テキストそのものを調査対象とした。

(2) その他の仏教類書の調査

『金蔵論』以外の仏教類書についても、文献学的な調査を進め、データの蓄積を試みた。当初の計画にもとづき、『金蔵論』と同様に譬喩因縁譚を集成した類書の調査を中心に進めたが、その過程で、仏伝故事をも視野に入れる必要があることが認識されるにいった。『金蔵論』は譬喩因縁譚に特化した類書といえるが、一方で仏伝にかんしては悉く無関心である。しかしながら、『今昔』の天竺部が仏伝を枠組みとすることに象徴されるように、説話集や唱導においては、仏の一生の事跡としての仏伝は、確実にその一角を占めるものである。そこで、仏伝故事を類化した文献にも対象を広げることとした。

(3) 研究成果の発信と国際研究交流

本研究は、日本のみならず、中国や朝鮮半島の宗教文献をも対象とするものであり、その意味では、東アジアにおける唱導という視点からのアプローチをも必要とするものである。近年、中国や韓国の研究者の間でも、法会唱導にかんする問題意識が高まっており、敦煌写本をはじめとする文献調査にもとづく研究が盛んである。本研究の成果については、国内外に発信するとともに、問題意識の共有をはかり、協働による研究進展を目指した。

4. 研究成果

(1) 『金蔵論』の研究

本研究開始時点で公刊されていた『金蔵論』は全七巻（一説に九巻）のうち四巻分であったが、その後、韓国の研究者により、高麗時代の版本が確認されたとの報が相次いでもたらされた。現物調査は叶わなかったが、韓国の研究者からの情報・資料提供を受け、新出部分の大部分を検討する環境が整えられた。これらの新出版本によってあらたに判明したテキストは二巻分であり、巻一から巻六にかけての本文がほぼ参照可能となった。

さらに、ロシアに所蔵される敦煌写本の中にも『金蔵論』の断簡を見いだすことができた。新出の断簡四点のうち、三点は僚巻であり、しかも、これまでに確認された巻一から巻六までの本文とは重ならない、新出テキストを含むものであった。新出本文が収載されていた巻や章については不明ながら、説話内

容や配列は、他の残存部分と通底することが確認され、『金蔵論』の全体像解明にむけての一步となった。

以上の新出本文について、原拠の仏典、『法苑珠林』等に収載される同話との対照を行った上で校訂本文を作成し、あわせて後世における引用といった基礎情報を一覧できるかたちに整えたことは、本研究の最大の成果である。このうち、敦煌写本の断簡については、すでに公刊を終えている（5. 主な発表論文等〔図書〕4.）。当初の計画では、研究期間中に韓国の版本も含めた新出本文を公刊することを目指していたが、韓国の版本については、所蔵者との調整に時間を要しており、研究期間終了後の公刊となる見込みである。

あらたに判明した『金蔵論』本文は、それ以前の研究において作成した復元試案が概ね当を得たものであったことを証するものであった。同時に、『金蔵論』の特徴として指摘した、唱導に特化した編纂意は、新出部分についても共通してみられることが確認された。例えば、『金蔵論』の布施縁第十二には合計十二話が収められており、現存章のなかではもっとも話数が多い。これは、『金蔵論』が法会の場における布施という行為を重視していたことを反映するものとかんがえられる。つづく慳縁第十三では、布施を妨げるものとしての慳とその悪果が語られており、布施縁から慳縁へという章の配列が、在俗の人々を対象とした唱導を念頭におきつつ、法会における布施を勧める文脈のもとになされていたことを裏付けるものとなっている。法会唱導に供することを目的に譬喩因縁譚を集成した類書という『金蔵論』の基本的な性格が、ほぼ確定したといつてよい。

そういった編纂意図に対応するかたちで『金蔵論』が実際に受容された痕跡として、天理図書館所蔵の『釈氏源流』版本の書き入れを指摘することができる。天理本『釈氏源流』は17世紀に朝鮮半島で刊行された版本であるが、その余白に書き込まれた説話が、『金蔵論』からの抄出であることが判明した。これは、『金蔵論』が17世紀においても参照されていたことを示すものとして、『金蔵論』受容の空白期間を埋める徴証であると同時に、法会における『金蔵論』の実際の使用状況を示すものとしても貴重である。そこに抄出される説話は、「布施功德」「造仏功德」といった法会唱導におけるキーワードを付して列挙されていることから、唱導における利用の目的で書きとどめられたことが推測される。『釈氏源流』が仏伝故事を集成したものであることをもかんがえあわせると、法会の施主や参列者などに対して、修善を勧め、讃歎する目的で、『釈氏源流』や『金蔵論』に収められた仏典由来の説話が語られた可能性が浮かび上がってくる。『金蔵論』が東アジアの広い地域で、かつて考えられていた以上に長期間において説話の源泉として機能していたことを物語るものといえよう（維

誌論文 2. 図書 6.)

一方、説話集との関係でいえば、新出説話のうち九話について『今昔』との密接な関係が看取された。九話はすべて『今昔』天竺部巻二に収められたものであり、そのうちの八話が『金蔵論』布施縁および慳縁に集中している点は、『今昔』の説話配列や採話基準をかんがえる上で示唆的である。『今昔』巻二にかんしては、主たる取材源として『金蔵論』があったことはほぼ確実であり、『金蔵論』の説話を核としてその周辺に同趣の説話が配されているとみることでもある。一方で、十話を収める『金蔵論』食縁からは一話も採録されていないなど、章による不均衡も散見する。『今昔』が未定稿とされることとの関連をも含め、さらなる考究を今後の課題としたい。

(2) 仏伝故事の受容研究

仏典に源を発する説話の受容と展開とを考察するにあたり、譬喩因縁譚だけでなく、仏伝故事をも対象に加えたことで、本研究は新たな方向に展開をみた。

近年、小峯和明氏の一連の研究をはじめとして、日本のみならず、中国や韓国、ヴェトナムの研究者の間においても仏伝文学にかんする関心が急速に高まっている。立教大学日本学研究所主催国際シンポジウム「日本と東アジアの 仏伝文学 と天竺世界」はそのあらわれである（研究代表者もまた本研究の成果の一部を発表した〔学会発表〕5.）。しかしながら、個々のテキストを対象とする本格的な仏伝文学研究は緒に就いたばかりであり、東アジアという視点からの巨視的な検討と同時に、個別の作品研究成果の蓄積が必要とされる段階である。そういったなかで、とくに、和製の仏伝文学のひとつの到達点ともいえる『釈迦の本地』について、諸本調査などの基礎的な文献研究にもとづいた上で、その成立基盤から、周辺文芸との交渉、近世における展開にいたるまでの具体相を明らかにしたという点は、本研究の特筆すべき成果といえることができる（〔雑誌論文〕1.〔図書〕1.3.6.ほか）。

たとえば、薪の行道などで広く知られる釈迦前生の仙人給仕譚にかんしては、原拠である『法華経』提婆品では具体的な仙人像が語られることはないが、『法華経』注釈や講経の場を経ることによって、太子を打擲する無慈悲で暴悪な仙人というあらたなイメージが付与され、それが『釈迦の本地』へと流れ込んでいることが確認できた。さらに、法会唱導の場においては、このような仙人打擲譚が仏の相好獲得の因縁としての機能をもって語られていたことが、『注好選』や『三宝絵』といった説話集からもうかがわれる。しかも、こういった仙人像は、テキストのレベルにとどまるものではなく、仏伝図や「法華経曼荼羅図」などにおいて絵画化されるものでもあった。『釈迦の本地』のテキストのみ

ならず、挿絵のなかにも、その図像の痕跡を有するものがあることは、『釈迦の本地』がそういった図像とも成立基盤を共有することを裏付けるものである。

『釈迦の本地』に代表される和製の仏伝文学は、仏伝故事を集成した『釈氏源流』、『釈迦八相次第』などの類書、法会唱導における因縁を集成した因縁集、さらには『法華経』注釈や直談書などを介して、豊かな譬喩因縁譚や仏伝故事の蓄積の上に成立したものととらえられる。そしてそういった基盤は、テキストのみならず、図像などをも含めて重層的・往還的に蓄積されたものであった。仏伝経典と仏伝文学や唱導との間に介在する仏教類書や因縁集などは、両者を単線的につなぐものではなく、あらたな伝承や言説を生み出す温床として機能するものであることが具体的に浮かび上がったという点で、本研究の目的達成に資する成果といえる。

(3) 研究成果発信と国際研究交流

本研究の研究成果や問題意識を説話文学研究者に向けて広く発信する場としては、平成 24 年度説話文学学会 50 周年記念シンポジウムにおけるセッション「説話と資料学、学問注釈 敦煌・南都・神祇」があった（平成 24 年 6 月 24 日、立教大学）。このセッションにコメンテーターとして参加し、『金蔵論』を核としながら、奈良朝写本、敦煌写本、朝鮮半島の版本といったテキストの問題や、東アジアの唱導における譬喩因縁譚の受容といった問題について言及した（〔学会発表〕11.〔図書 5.〕）。

本研究は、東アジアにおける唱導研究の一端を担うものであるが、日本における唱導研究は、海外の研究を牽引する立場にあるといえてよい。研究代表者は、これまで研究成果の発信とともに、「唱導」という問題意識を共有する目的で、広島大学敦煌学プロジェクトセンター等との共催で、東アジア宗教文献国際研究集会を開催してきた。本研究期間においても、3 回にわたり、国内外で研究集会を開催した。中国、台湾、韓国、北米からも研究者を招聘し、問題意識を共有するとともに、仏教史、歴史、美術史等各方面からの示唆を得ることができた。（〔学会発表〕2.6.8.）

1. 第 3 回東アジア宗教文献国際集会「冥界と唱導」（2013 年 3 月 12・13 日、明海大学）
2. 第 4 回東アジア宗教文献国際集会（2014 年 3 月 15 日・16 日、国立政治大学（台湾））
3. 第 5 回東アジア宗教文献国際集会「玄奘フォーラム」（2015 年 12 月 12 日・13 日、筑波大学東京キャンパス）

また、藤本幸夫氏の企画によるシンポジウム「朝鮮出版文化と中国・日本」（東方学会平成 25 年度秋季学術大会）においては、朝鮮半島の『金蔵論』版本についての情報提供

者でもある南権熙氏らとともにパネリストとして参加し、研究成果を発表すると同時に、朝鮮半島の出版にかんする最新の知見を得た（『学会発表』7.）。『金蔵論』や『釈氏源流』といった仏教類書の東アジアにおける受容の問題にかんしては、ひきつづき中国、韓国の研究者と情報交換を行い、研究協働の可能性を模索したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 本井牧子「『釈迦の本地』の諸本」（『京都大学国文学論叢』35号）47～69頁、2016年3月31日。単著。「査読有」
<http://dx.doi.org/10.14989/210389>
2. 本井牧子・桂弘訳「東亞的唱導中の《金蔵論》以朝鮮版《釋氏源流》空白頁上の填寫内容為端緒」（『中國俗文化研究』第9輯）12～29頁、2014年12月。単著。「査読有」
3. 本井牧子「志水文庫蔵『六道变相八大地獄図』十王・十三仏信仰にもとづく預修・融通念仏の遺品」（『國華』第1427号）36～47頁、2014年9月。単著。「査読有」

〔学会発表〕（計11件）

1. 本井牧子「『金蔵論』再考」（第四屆佛教文獻與文學國際學術研討會、2016年11月4～7日。於浙江大学（杭州浙江・中華人民共和国）。単独発表。
2. 本井牧子「慈恩をめぐる唱導における玄奘」（筑波大学人文社会国際比較研究機構（ICR）・第5回東アジア宗教文献国際集会共催「玄奘フォーラム」、2015年12月12日。於筑波大学東京キャンパス（東京都・文京区）。単独発表。
3. 本井牧子「彷徨える仏像 清涼寺蔵『釈迦堂縁起』の釈迦像」（『ひと・もの・知の往来 国際比較日本文化研究の可能性を探る』シルクロード国際研究フォーラム、2014年11月15日。於タシケント国立東洋大学（タシケント・ウズベキスタン共和国）。単独発表。
4. 本井牧子「清涼寺蔵『釈迦堂縁起』の仏伝」（第三屆佛教文獻與文學國際學術研討會、2014年10月19日。於四祖寺（湖北省黄梅県・中華人民共和国）。単独発表。
5. 本井牧子「『釈迦の本地』とその周辺」（立教大学日本学研究所主催国際シンポジウム「日本と東アジアの 仏伝文学 と天竺世界」、2014年7月26日。立教大学（東京都・豊島区）。単独発表。
6. 本井牧子「唱導における仏伝と因縁の位相」（第4回東アジア宗教文献国際集会、2014年3月15日。国立政治大学（台北

市・台湾）。単独発表。

7. 宮井里佳、本井牧子「朝鮮半島における『金蔵論』 仏書刊行の一例として」（『東方学会 平成二十五年度秋季学術大会、シンポジウム 「朝鮮出版文化と中国・日本」、2013年11月8日。於日本教育会館（東京都・千代田区）。
8. 本井牧子「地獄・十王と預修・融通念仏 志水文庫蔵『六道变相八大地獄図繪巻』をめぐる」（第3回東アジア宗教文献国際集会、2013年3月13日。明海大学（千葉県・浦安市）。単独発表。
9. 本井牧子「新出の『金蔵論』敦煌本断簡」、国際仏教学大学院大学 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」平成24年度第2回公開研究会、2012年11月10日。於国際仏教学大学院大学（東京都・文京区）。単独発表。
10. 本井牧子「仏の三十二相とその因縁」、ヘルシンキ大学・タリン大学・筑波大学 日本研究学術フォーラム、2012年9月7日。ヘルシンキ大学（ヘルシンキ・フィンランド共和国）。単独発表。
11. 本井牧子、説話文学会平成24年度大会シンポジウム第二セッション「説話と資料学、学問注釈 敦煌・南都・神祇」（2012年6月24日。立教大学（東京都・豊島区）。コメンテーター。

〔図書〕（計7件）

1. 本井牧子「『釈迦の本地』とその展開 涅槃の場面を端緒として」（小峯和明編『東アジアの仏伝文学』勉誠出版、印刷中）2016年。分担著。「査読有」
2. 本井牧子「彷徨える仏像 清涼寺蔵『釈迦堂縁起』の釈迦像」（『ひと・もの・知の往来 国際比較日本文化研究の可能性を探る』シルクロード国際研究フォーラム 報告書）61～70頁、2014年12月。分担著。
3. 本井牧子「『釈迦の本地』とその基盤 『法華経』とその注釈世界とのかかわり」（神戸説話研究会編『中世・近世説話と説話集』和泉書院、295～319頁）2014年9月。分担著。「査読有」
4. 本井牧子「新出の『金蔵論』敦煌写本」（『東方学研究論集』東方学研究論集刊行会、254～267頁）2014年6月。分担著。「査読有」
5. 本井牧子「第2セッションコメント」（説話文学会編『説話から世界をどう解き明かすのか』笠間書院、236～244頁）2013年7月。分担著。
6. 本井牧子「『釈迦の本地』とその淵源 『法華経』の仙人給仕をめぐる」（小峯和明監修、石川透編『中世の物語と絵画』「中世文学と隣接諸学」シリーズ9、竹林舎、215～243頁）2013年5月。分担著。「査読有」

7. 本井牧子「東アジアの唱導における『金蔵論』 朝鮮版『釈氏源流』にみられる書入を端緒として」(荒見泰史・桂弘編『第2回東アジア宗教文献研究集会報告書』広島大学敦煌学プロジェクト研究センター、159～200頁) 2013年3月。分担著。中国語訳：桂弘。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本井 牧子 (MOTOI, Makiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00410978